



ベネズエラ

派遣期間 2012年4月～2015年3月

# カラカス日本人学校 帰国報告

鹿追町立笹川小学校

教諭 河江 邦教

## 1 はじめに

ベネズエラ・ボリバル共和国は南米大陸の北部に位置し、北はカリブ海に面し、東はガイアナ、南はブラジル、西はコロンビアと国境を接している。国土の広さは日本の約2.4倍で人口は約2800万人である。首都カラカスは、カリブ海から直線距離で約15kmの所にあり、ベネズエラ北部の東西ほぼ中央部に位置している。気候は、一般に雨季（4～10月）と乾季（11～3月）に分かれており、年間平均気温は20～25℃で、湿度が低いので年間を通して過ごしやすい。しかし、治安には多くの問題を抱えており、政情は不安定である。現在、外務省からカラカス首都区に注意喚起が発令されており、「渡航の是非を検討してください」という勧告がされている。また、物価についてもインフレが年々進んでおり、価格が高騰している。さらに、交通機関の遅延など何が起るかわからない場所である。カラカス日本人学校の教育活動も、これらの治安の問題に大きく影響を受けている。

そこで、任期中に知り得たことや経験したことのほんの一部であるが、ベネズエラや首都カラカスの概要、カラカス日本人学校の概要と特色ある教育活動、カラカスの治安と生活について報告する。

## 2 ベネズエラ、首都カラカスの概要

### (1) ベネズエラの概要

#### ① 正式国名

ベネズエラ・ボリバル共和国

(Republica Bolivariana de Venezuela)

#### ② 位 置

北部はカリブ海に面し、東部はガイアナ、南部はブラジル、西部はコロンビアと国境を接する。北緯0～12度、西経59～73度に囲まれた範囲に位置する。

#### ③ 人 口 2883万人（2012年）

#### ④ 面 積 912,000km<sup>2</sup>（日本の約2.4倍）

#### ⑤ 首 都 カラカス首都区

#### ⑥ 言 語 スペイン語

#### ⑦ 人種構成

混血66%、白人22%、黒人10%、原住民2%

#### ⑧ 独 立 1811年7月5日

#### ⑨ 政治体制 立憲共和制

#### ⑩ 元 首 ニコラス・マドゥーロ大統領

#### ⑪ 宗 教 主としてカトリック教

#### ⑫ 通 貨

単位「ボリーバル（Bs. F.）」



⑬ 時 差 マイナス 13 時間 30 分

※日本：12月31日午後9時 → ベネズエラ：12月31日午前7時30分

(2) 首都カラカスの概要

① 位 置

首都カラカスは、カリブ海から直線距離で約 15 k m の所にあり、ベネズエラ北部の東西ほぼ中央部に位置。

② 名前の由来

カラカスの名称は、カラカス盆地の原住民であるカラカス族に由来。

③ 地 形

首都は、ラ・コスタ山脈の 900～1, 000 m の高所にあり、東西約 20 k m、南北約 5 k m の盆地の中に位置している。首都とカリブ海の間には、アビラ山がそびえている。



④ 気 候

一般に雨季（4～10月）と乾季（11～3月）に分かれる。年間平均気温は 20～25℃で、湿度が低いので年間を通して過ごしやすい

⑤ 治 安

多くの問題を抱えており、政情は不安定。1999年2月にウーゴ・チャベス政権が誕生したが、治安の変化もなく、窃盗、強盗、殺人事件、交通事故などは頻繁に起きている。銃による事件も多い。日本人の住む住居の外壁には電流が流れ、二重三重の施錠がなされている。

現在、外務省からはカラカス首都区に注意喚起が発令されており、「渡航の是非を検討してください」という勧告がされている。

⑥ 医 療

医療設備は整っており、24時間体制の緊急総合病院が日本人居住区近くにある。医薬分業で、薬は医師から処方箋を受け取って、近くの薬局で買う仕組みである。

⑦ 交 通

首都カラカスには、地下鉄が4路線運行するなど、中南米の国々の中では交通網が発達していると言える。自動車の台数は非常に多く、縦横に高速道路（アウトピスタ）が整備されているが、慢性的な渋滞となる。バスやタクシー、乗合バスもあるが、治安上、日本人の多くは、基本的に自家用車を利用している。

⑧ 住 宅

カラカスには、「キンタ」と言われる庭付きの広い一軒家、高層マンション、「ランチョ」と言われるブロックを積み上げた小さな家の3種類の住宅があるが、日本人駐在員は現在、警備員付きの高層マンションに住んでいる。

⑨ 物 価

インフレが年々進んでおり、物価が高騰している。物価上昇率は政府発表でも毎年 30%程度。2014年6月から2015年5月までの年間インフレ率は、108%と驚異的である。消費税は 12%。ただし、生活必需品は非課税である。

## ⑩ 通 信

郵便事情は悪く、手紙は航空便で約2週間かかる。また、小包などは、途中で開封され、紛失（盗難）にあう場合もある。料金は割高だが、民間宅配業者を使えば、ほぼ確実に荷物の受け取りができる。

携帯電話はほとんどの人が持っており、無料のWi-Fiは日本よりも普及している。

## 3 カラカス日本人学校について

### (1) カラカス日本人学校の概要

① 位 置 日本人の居住区から約20km、アティージョ市の住宅街にある。

② 創 立 昭和50年(1975年)11月1日。今年度40周年を迎える。

③ 設 置 者 二水会（日本企業団体）

④ 運営主体 カラカス日本人学校理事会

⑤ 児童生徒 6名（平成27年度）

進出企業、大使館、日本人学校等の子女を中心に、私の派遣期間は5～10名程度が在籍していた。

⑥ 教 員 等

派遣教員は校長を含め5名。現地採用の日本人教員1名とベネズエラ人の語学講師1名。事務2名、運転手1名、警備員3名、管理人1名。



### (2) カラカス日本人学校の特色ある教育活動

#### ① 運動会

本校は児童生徒の人数が少ないこともあり、運動会には、地域の方々に多数参加を呼びかけている。二水会（現地進出日本企業の会）、日本人会、シモンボリーバル大学（以下USB）の学生、その他、日本の文化に興味があり日本語教室に通うベネズエラの方など約300名の参加で、盛大に実施している。



児童生徒は、中学部と小学部高学年を中心に実行委員会を編成し、スローガン作りから応援合戦の計画などを進めた。低学年児童が多いという事情もあり、自主的な活動が難しく教師主導となる場面も多かったが、それぞれが自分の役割に責任を持って活動する姿が見られた。また、低学年児童にも種目への参加だけでなく、開・閉会式での挨拶担当などの役割があり、少人数のよさを生かし活躍の場を多く設定することができた。また、参加者全員で「盆踊り」と「Zumba（ズンバ）」を踊り、大いに盛り上がった。

1年間の中でも最大級のこの行事への取組を通して、児童生徒がそれぞれに満足感や達成感を味わい、大きく成長することができたと考えられる。

#### ② 修学旅行の実施

平成26年度から児童数減少から対象学年を小学部4年生まで引き下げ、小学部3年生は保護者の承諾があれば参加できるようにした。また、近年の国内の治安情勢の悪化から、事前に大使館の安全担当領事から情報を得て、旅行地の選定を行っている。

平成 26 年度は、国内有数のリゾート地であり、観光地であるマルガリータ島とした。マルガリータ島には JICA 隊員がいることから、JICA カラカス支部と連絡をとり、治安状況の他、修学旅行時の現地でのアテンドの協力をお願いした。活動地は、島の西部の小さな漁村。隊員の方と相談しながら、その漁村を中心としたプランを立てた。現地の学校訪問、村長宅での昼食、海洋博物館見学、マングローブ林ツアーと多彩なものとなった。村長宅での昼食は、隊員がエコツアーリズム活動をしている拠点であった。今後は、修学旅行のような観光客を受け入れながら現金収入を増やしていきたいと計画していたようだ。その矢先の修学旅行の話であったようで、我々が初めての受け入れとなった。



海洋博物館に立ち寄った際、亀などの海洋生物、またサンゴのはく製などを見ることができた。海洋博物館では JICA 隊員の友人が務めている関係で、特別料金ガイド付きで館内を詳しく説明してもらえた。

現地校との交流では、自己紹介のあと、お土産（けん玉、ドッジボール、バスケットボールなど）を渡した。現地にも「ペリノーラ」と呼ばれるけん玉があり、形の違いに驚きながらも日本人学校の子どもが遊び方の見本を見せると、現地校の生徒から「オーッ！」と歓声が上がった。その後、校庭でのキックベースボール大会となった。チーム分けや審判などを、現地校の先生がすべて行ってくれた。日照条件等厳しいことから、場所は屋根付きの運動場であった。15名でキックベース大会が開かれた。子ども達は、とにかく笑顔だった。たくさんの好プレー・珍プレーが出た。ホームランも飛び出し、ハイタッチ・ガッツポーズ、子ども達に国境・言葉の違いなどは関係なかった。この様子について、JICA 隊員が活動報告ブログ (World Reporter) に紹介してくれた。村長宅に移動し、マルガリータ島ならではの昼食となった。現地で食べられている巨大サイズの「アレパ (ベネズエラの主食の一種。とうもろこし粉を原料に作られるもの。)」を目にした子どもたちは、興奮気味に食べていた。同じベネズエラでも、アレパの大きさ・食べ方に違いがあることを初めて知った



修学旅行では「自分のことは自分でする場を設ける」ことをねらいとした。荷物の準備から、旅行先での買い物の価格交渉、宿泊中の生活など自分でできることは基本的に自分でやるように指導した。また、実施前に「スペイン語」の授業で、買い物で必要な言葉や困った時の言葉などを学習した。お土産屋では、値切り交渉までする様子も見ることができた。カラカスでは、治安の関係上、子どもがお金を持って買い物をすることはなかなかできない状況がある。しかし、旅行先ではカラカスほど治安が悪くないのでそういったことも可能であった。教育課程編成を工夫し、語学力を上げて修学旅行に臨むことで、現地の人と会話し「言葉が通じる」喜びを味わうことができたであろう。

### ③ 宿泊学習

1泊2日の宿泊学習を実施している。少し前は、校外にある野外活動施設を使って行われていたが、近年は学校での宿泊学習としている。目的も、以前は「緊急時のための宿泊訓練」と

いう項目があったが、緊急時は保護者のもとに帰すことになっている今は、連帯感，協調性を養う場，体験的な活動の場，ベネズエラ理解の場としている。

宿泊学習は、ただ単に学校に宿泊し野外炊飯するだけが活動ではない。学校を拠点に体験活動や、ベネズエラ理解のための学習活動をどう仕組むかがポイントとなる。体験活動として「焼き板づくり」「キャンプファイヤー」として、「学校周辺のレストランでの昼食」「昼休みをかねてポリバル広場散策」「八百屋での買い物」を行った。またベネズエラ人の講師を頼み「焼物体験」も行った。

低学年が多い中での宿泊学習であったが、全員が協力し、共に楽しく活動できた宿泊学習であった。宿泊学習は親元を離れて過ごす貴重な時間でもある。その貴重な時間にいかにも魅力的な活動をいっぱい仕組み、子どもたちにとって楽しく、やり甲斐のある時間にするかが企画のポイントであろう。

#### ④ 現地校との交流

国際理解教育の一環として、現地校との交流学习を行っている。日本人学校の近くにあるマリア・アウシリアドーラ校（以下、マリア校）との交流学习を行った。マリア校の受け入れ担当の方と事前打ち合わせを行い、授業内容・文化交流会の内容を確認して事前準備を進めてきた。派遣3年目には、カラカス日本人学校で2回の交流、マリア校で1回の交流と計3回の交流の場を設けることができた。

カラカス日本人学校では、体育交流と文化交流を行った。体育交流では、玉入れや綱引きを一緒に行った。マリア校には運動会という行事がないため、運動会種目の交流は、現地の子供達にとって興味深いものであったようだ。さらに、文化交流では、毛筆体験を行った。日本人教員が書道を教えるのではなく、子ども同士で教え、関わりあひながら交流していく方法をとった。書き順や字の意味をスペイン語とジェスチャーを使って教え、日頃学習しているスペイン語を使う場面を設けた。最初は、緊張している子どもたちも



徐々に打ち解けあひ、楽しんでいる様子を見ることができた。

マリア校では、一緒に教室で工作をしたり、絵を描いたりした後、現地の踊りを披露してくれた。独特のステップに子どもたちは食い入るように見ている。

数少ない同年代の現地の人たちとの交流の機会である。だからこそ、スペイン語での受け答えも大事であるが、それを越えた気持ちの交流、積極的に話しかけよう

とする気持ちをもつことが重要であると感じた。



## ⑤ 学習発表会

学習発表会は、運動会と並び本校の学校行事の中心となっている。少人数のため、午前中で終わる内容の学習発表会になっているが、一人一人の出番が多くなっている。

内容として、本校の特色ある教育の一つであるスペイン語の学習で学んだ成果も含め、学習の成果を中心に発表している。例えば、生活科で作ったおもちゃの紹介や空気砲などを使っての実演実験、社会科で見学した警察や消防のこと、平和についての意見文などを発表した。

さらに、カラカス日本語教室に通う上級クラス生徒6名が、本校の学習発表会に参加した。年齢制限を設けないことで、中学生から大学生まで幅広い年代の人たちが発表を行えるようにした。彼らは、日本のアニメや文化に興味をもち、自ら進んで日本語を学ぼうとして、日系人会が主催する教室に通っている。発表2か月前、我々が土曜日に日本人会館で行われているカラカス日本語教室を訪れて説明をし、日本語で書きたいことを事前に作文にしてもらった。そして、1か月前からカラカス日本語教室への指導を集中的に計画し、日本語教室で指導している先生と日本人学校の教師が添削指導などを行い、完成した作文を発表することができた。ベネズエラで日本語を勉強している人たちの熱意とレベルの高さに、本校の子どもたちが良い刺激を受けていた。



教科担任制をとっているため、練習時間をどれだけ有効に活用するかが焦点となった。そこで、打ち合わせの際に、1単位時間を分刻みで振り分け、効率的な練習に努めた。特にスペイン語の発表では、学習してきた成果を表現することは容易なことではない。スペイン語環境で生活した経験年数によっても差が出る。そこで、児童生徒それぞれの語彙力を考え、担当教員と内容について確認し合い、練習を行ってきた。

他にも、廊下に今年度も児童生徒が日頃の学習でまとめた作品、この発表に向けて作り上げた作品などが校舎1階の廊下中に掲示される。児童生徒数が年々減少する中で、児童生徒、そして各教科担当が知恵を出し合って、様々な作品を作った。

## ⑥ キャリア教育の充実

日本とベネズエラ両国の懸け橋として活躍している日本人の話聞くことで、「国際社会における日本の役割について知る。」「自分の将来の仕事や進路について関心をもつきっかけとする。」というねらいをもって取り組んだ。参加対象を小学部3年生からとし、実施した。講師は、休日にサッカー同好会やソフトボール大会などで接する機会が多く、児童生徒と関わりのある方を中心をお願いをし、普段は知ることのでき

ない話をしてもらった。商社・石油開発・自動車・大使館と、ベネズエラにいるからこそ聞くことのできる内容が多くあり、児童生徒にとって貴重な体験になったことだろう。生



き方や進路への関心が高まり、より幅広く将来のことを考える意欲を喚起することができた。

どの講師の方も、「大きなプロジェクトに参加することのやりがい」について熱く語ってくれた。また、人との関わりがどれだけ大切なのかについても話してくれた。貴重な経験からの指針をいただき、より具体的かつ主体的に進路を考えるきっかけをつかむことができたであろう。

#### ⑦ アビラ登山

カラカス居住区からほど近いアビラ山への登山は、本校での伝統行事であり、「普段できない登山をすることにより、自然の様子を観察し、自分たちの住んでいるカラカスの街を望むことで、現地理解を深める」「精神力と体力を養い、達成感を味わう」「児童生徒相互のつながりを深める」ことをねらいとし実施されている。



平成24年度は治安悪化のため実施することができなかったが、25年度・26年度は一緒に登山させる学校警備員の人数を増やすなど更なる安全対策を行い、実施することができた。

登山2か月前に教職員が下見を実施し、登山の際の注意事項や予想されるトラブルなど、具体的な対策のイメージを共有している。

治安の悪いカラカスにおいて、子どもたちが長時間続けて歩く機会は、ほとんどない。そこで、登山に向けて業間休み（20分休み）に5分間走を実施した。体力づくりへの動機付けのために、「ベネズエラ1周すごろく」を使用した。このすごろくは、校庭を1周走るとマスを進めることができ、100周でベネズエラ1周となる。100周ごとにシールを貼ることができるようにしたことも、意欲を高める一助となった。警備員も共に登頂めざし、楽しんで登山できる様と一緒に体力づくりを行った。教職員から声をかけるのではなく、子どもたちから誘いに行く形で参加を促した。業間休みだけでなく昼休みなどの空いた時間を見つけては校庭を走る児童生徒の姿に、この取組が体力づくりへの意欲付けに効果的であったことを感じた。



それぞれに目標地点を定め、3班集体で登山を行うよう計画した。体力づくりを行いながら、各自目標地点を決めるよう指導した。その目標地点に応じて、児童生徒にさらに走り込みが必要などのアドバイスをを行った。平成26年度は、結果的に2班集体となった。2つの班とも目標地点に到達することができた。途中、無線を活用し、現在位置をお互いに伝え合うことで、位置や児童生徒の状態を把握することができた。

子どもたちに体力づくりの段階から自分の目標を明確に持たせることで、全員が目標地点までたどり着くことができた。5分間走と登山の取組を通して「あきらめない気持ち」

の大切さを指導することができた。登山の時には、無線の入れるポイントや携帯電話の電波状況などを下見で把握していたため、登山中の連絡を密に取ることができた。

#### 4 カラカスの生活と治安

カラカスは、外務省からも「渡航の是非を検討する」地域となっている。そのため、治安も決して良いとは言えない。私が生活していた3年間は、激動の3年であったといっても良いだろう。平成24年10月には、大統領選挙による休校。平成25年3月には、チャベス大統領の逝去。そして、国葬。同年4月には、再び大統領選挙。平成26年2月には、青年の日のデモにより治安の一層の悪化、さらには、5月上旬まで休校の措置。その間、教員が児童生徒宅への訪問授業や教員宅での授業の実施となった。さらに、平成26年9月以降には、物不足の悪化でトイレットペーパーやシャンプーなど日用品を購入することが難しくなった。インフレ率も高くなり、更なる治安の悪化に繋がったことは言うまでもない。

派遣1年目・2年目には品物を選ばなければ日用品も簡単に手に入れることができた。また、街中も十分に気をつけることで短い距離ならば歩いて移動することも可能であった。しかし、その時も注意を怠ることなく、万が一に備え、「命金」として現金を多めに持ち歩き、何かあったらすぐに渡せるようにしておいた。また、暗くなったら出歩かないなど、現地で生活する上で最低限気をつけなければいけないことを常に意識していた。そのため、特に危険な目に合うことなく生活することができた。また、近くに住んでいる日本の方と情報交換を密にすることで、生活する上で非常に助けられた。特に3年目、日用品の購入が難しくなったときには、見つけた人が連絡を取り合い購入するなどの情報交換が重要になっていた。

平日は、スクールバス担当として、午前6時30分のバス無線後に出勤することが多かった。そのバス無線で、警備員の出勤状況も把握していたため、警備員の遅刻などがあった場合は対応に追われることもしばしばあった。

休日には、サッカーやテニスなどスポーツを通して、異なる職種の方々といろいろな話をする機会があった。また、いろいろな方の支えがあって、マラソン大会にも(5kmの部だが)参加することができた。早朝のカラカスの街の道路を走っていると、車窓から見える景色とは一味異なり、感慨深かった。

#### 5 おわりに

3年間のカラカスでの生活はあっという間に終わってしまった。初めてカラカスの空港に降りた際、入国審査で話しかけられたスペイン語はさっぱりわからなかった。しかし、3年も生活をしていると、何となくではあるが言葉も理解できるようになった。

そこまでは、たくさんの方々との関わりがあった。生活基盤の立ち上げ、買い物、スペイン語など、支えてもらったからこそ、すぐに生活も軌道に乗り、楽しめたと思う。海外に出たからこそわかる日本の良さも実感した。また、「何が起こるかわからない中南米」を意識しながら、常に危機管理意識をもっていかなければならいことも学んだ。

海外で知り合った方々に縁を感じつつ、今後もカラカス日本人学校の益々の発展を願っている。